慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	偽オランダ人たちの江戸 : シーボルトの巻(その一)
Sub Title	Edo der Pseudoholländischen
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.90, (2006. 6) ,p.218(51)- 235(34)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00900001-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

偽オランダ人たちの江戸

シーボルトの巻（その一）

柴田　陽弘

一

巨大な青黒いミミズが紀州や九州で観察されている。長さは 30 cm を下らない。太さも 2 cm 以上はあるだろうか。どうやらシーボルトミミズと呼ばれているらしい。あるいは、かつて長崎出島のシーボルト宅にあったクロウメモドキ科の落葉低木に、植物学者の牧野博士は「シーボルトの木」と命名している。これはわずかな例にすぎないが、シーボルトが来日外国人のなかでもとりわけ知名度が高く、だれよりも敬愛されていたことを示すものである。またシーボルトも日本を愛して已まなかった。日本関連の数々の著作を通して東洋の神秘の国を科学的にヨーロッパに紹介する一方、日本に近代科学を伝え多くの英才を育てた。紫陽花に日本時代の愛人楠本瀧の名に因んで「オタクサ」Hydrangea Otaksa と命名して、日本への愛着も刻印している。[1] ドイツ人シーボルトの日本入国の意図とその後の行動には不明の点が少なくないが、長年にわたってシーボルトと日本人との蜜月が続いたことは否定できないのである。[2]

シーボルトは 1796 年 2 月 17 日、南ドイツのヴュルツブルク市に生まれたドイツ人である。1820 年に同市の大学医学部を卒業後、オランダ領東インド陸軍病院付軍医大尉に任用されてバタヴィア（現ジャカルタ）に赴任した。この頃ジャワ島総督であったホデルト・ファン・デル・カペレン男爵はシーボルトを高く評価し、オランダ使節団に随行して日本へ赴く

よう慫慂した。こうしてかれは、1823 年（文政 6 年）の夏、27 歳にして長崎出島にオランダ人外科少佐として派遣される。来日後、長崎市外の鳴滝に塾を開き、多くの俊秀を育てた。弟子たちが後に日本各地で近代科学を広めたことを考えれば、シーボルトの功績は計り知れないのである。かれがオランダ政府から託された任務は、博物学的な蒐集、日本民族の歴史、地理、政治制度、慣習、産物等の情報の収集、最新のヨーロッパ医学の普及といったものであった。あきらかにここにはヨーロッパの覇権主義に参入しようと日本を射程にいれた小国オランダの意図が感じられる。シーボルト・スパイ説が根強いのもここからきている。[3] 時はまさに博物学の時代で、シーボルト自身、医学のみならず植物学、動物学、地文学、人種学等に旺盛な関心を寄せていた。こうしてシーボルト個人の万有学的興味とオランダ政府の意図が利害の一致をみたということであったろう。片桐一男氏によれば、シーボルトの資料蒐集の方法はつぎの四点に集約できる。（1）診療を通して日本人と交流を深め信用を確保したこと。（2）出島と鳴滝での臨床教授により優秀な日本人の協力を得たこと。（3）人脈を十分に活用して、日本中から資料を蒐集したこと。（4）上の成果を克明に組織的に記録したこと。[4] まさしく診療活動と鳴滝塾での教育とがシーボルトの人脈の基礎を築いたことは否めない。当時の日本最高の若い知性が尊敬する先生のために資料の蒐集に手を貸した。今日ヨーロッパに遺る厖大なシーボルト・コレクションはこれが基礎になっている。シーボルト自身に素朴な日本人を巧みに誘導した節も見られる。[5] かれはまた江戸参府の機会をとらえて資料蒐集を精力的に行った。オランダ人の江戸参府旅行は初め毎年ないし隔年で行われたが、シーボルト在日の頃には 5 年に 1 度になっていた。シーボルトは来日して 3 年目の 1826 年（文政 9 年）に江戸へと東上する。満を持しての参府であった。薬剤師ビュルガー、門人二宮敬作、絵師川原慶賀などを書記や従者の名目で同伴させた。参府に当たってシーボルトは綿密に計画を立てたらしい。通詞たちをも手なづけて私用に利用した。禁制の資料収集を大胆に行っているから、これは明らかに諜報活動である。当時の日本の政体に反するかれの行動が、結果とし

て江戸時代の貴重な生々しい生活資料を今日に伝えることとなった。

二

最初のオランダ使節団が将軍を江戸に表敬訪問したのは 1609 年（慶長 14 年）のことである。二代将軍秀忠の治世であった。以後、連合オランダ東インド会社から派遣された使節たちが将軍に拝謁するのが習慣になった。使節たちは豪華絢爛たる献上品を携え、立派な行列を仕立てて江戸へ上った。その後、日本が貿易制限を実施し、オランダの貿易益が縮小すると、次第に派手な参府は影を潜めることになる。1691 年（元禄 4 年）にエンゲルベルト・ケンペルがヘンドリック・ボイテンヘイム使節に随行したころは、驚くほど監視が厳しくなっていた。これ以後、毎年オランダ出島の商館長は 2・3 人の館員を引き連れて将軍に拝謁するようになった。1790 年（寛政元年）に貿易量が半減すると、参府は 5 年目毎と定められた。ただし献上品は毎年通詞によって届けられた。さて参府の手順は以下のようであった。[6]

商館長が定められた事務手続きに則り長崎奉行に参府の覚書を届け出ると、奉行は江戸幕府に使節と随員の氏名を報告する。その後、奉行は商館幹部に出頭を命じ、商館長不在の間は商館の秩序維持に留意するよう勧告する。このような手順を踏んでようやく出立の運びとなる。商館が平戸にあったころから出島移転後の 1657 年（明暦 3 年）までは、九州の北西海岸沿いに下関港に到り海路大坂へ向かうのが通常の行路であった。1661 年（寛文元年）にヘンドリック・インディクは長崎から時津へ出、大村湾を海路彼杵（そのぎ）へと渡り、肥前（佐賀）、筑前（福岡）を経て小倉へ、ここから船で下関へ行き、さらに大坂まで海路をとった。この行路が禁じられたため、1776 年（安永 5 年）には小倉まで陸路をとるようになった。ケンペルやブロムホフなどが別のルートをとったこともあるが、どの使節も大坂からは陸路をとるのが普通だった。

使節団の随員は、ブロンクホルストの時で 20 名、ケンペルの時で 4 名、ツンベリーの時は 3 名と次第に縮小して、ついに 1790 年（寛政 2 年）

に使節団は 3 名と決められた。通常は商館長、書記、医師の 3 名である。これに随行し監視する日本側は、給人、御番上使、舟番、町使、大通詞、小通詞、筆者、宰領、人足頭、従者、賄方、従僕、同心など総計 35 名に上った。使節団は、あらかじめ長崎奉行に届けさえすれば、自前でそれぞれ数名の従僕を連れて行くことができた。私用に使うためである。シーボルトはこの定めを最大限に利用した。名目さえつければ内実を詮索されなかったからである。また身分に応じて駕籠の格式も駕籠舁きの人数も決まっていた。オランダ国立民俗学博物館所蔵の「出島商館長江戸参府行列図」を見ると、小通詞と医師と商館長では、荷も駕籠も従者もすべてに差がある。[7] 荷物の量も自分持ちであれば自由に増やすことができた。長持 2 個、両掛 2 組、行李 4 個、合羽籠多数という大荷物を持っていけるのは商館長だった。

日本の役人の旅費、海陸の輸送費、宿泊料と食費、宿舎の主人への謝礼等はオランダ側が会所に支払う物品（蘇芳など）と現金により賄われた。しかしながら収支決算を出すと会所には相当の損失となった。[8] オランダ商館の役人も旅費を捻出するために投機に手を出したということである。旅の途上に日本人から示される好意にむくいるために小物や贈答品や記念品をオランダ側はたくさん携行していた。そういった品物は異国のものであるから珍重され感謝されることが多かった。江戸の官僚体制下で賄賂は慣習化していたから、オランダ側が用意する将軍や高位の者への献上品は相当の金額に達した。贈答の相手は、将軍とその世子、5 人の老中、寺社奉行、2 人の江戸町奉行、勘定奉行、京都所司代、大坂の町奉行 2 人である。献上品は通常では毛織物や絹布、更紗、金糸銀糸の織物などであった。これらには必ず予備の品が用意されており、余った品物は売却してもよいことになっていた。この業務に当たったのは通詞である。しかし日本側も貰いっぱなしであったわけではない。献上品には返礼の品が贈られた。将軍と世子から絹服がそれぞれ 30 着と 20 着ずつ、高位高官の者から合計 147 着である。バタヴィアの蘭印政庁へは将軍からの返礼品が送られ、商館長はあとの衣服を拝領するのが慣例であった。陸上旅行は大名行列と同

様にまず献上品が粛々と進み、相当の距離をおいて町使 2 人が後に続く。さらに小通詞、医師、書記、使節、大通詞、船番、給人の順で進んだ。貴人は左、高位の者ほど後に、という決まりであった。

出発は通例 1 月の 7 日か 9 日で、その前日に上席番上使が出島に現れ、町使がオランダ人の私物を形ばかり検査して封印を施す。当日は日本人全員が集合し、オランダ人と献上品を出迎える。長崎奉行の祝辞を承った後、大波戸広場を経て天神社にて小休止し、見送りの人々と別離の酒を酌み交わすと長崎峠へ向かう。そこには町役人たちが待ち構えており、一行に口々に別れを述べる。長崎市民の野次馬も多数路傍で見物していて、旅行に必要な品々を餞別に贈ったりする。

三

さてシーボルトは上のような手順を踏んで江戸へと旅立った。かれはこれに先立って周到な準備をした。できるかぎり収穫を上げるため、日本の位置、住民の言語、風俗習慣などを詳しく事前に調査した。これには医学や自然科学の講義を受けるため全国から参集していた弟子の医師たちが役立った。生(せい)標本、乾腊(かんさく)標本などの博物標本や動植物や鉱物の標本、図譜、書物などを先生への贈物にしたためである。また患者たちも珍しい博物標本を競って先生に届けた。出島の植物園には何千という植物が集まったし、長崎の港で魚介類を集め、また猟師を雇って鳥獣を蒐集した。江戸への途次に、文化、商工業、社会慣行など全般に亘って見聞を広めることを目指した。シーボルトは、3 年の滞在で日本が建前の世界であることを慧眼にも見抜いていたのであろう。博物学や医学を将軍の御典医に教えることを口実にして国内を旅行し情報を収集しようと目論んでいた。すでにかれの名声は赫々たるものであり、しかも有力者たちの口添えもあったから、この計画はあながち画餅というものでもなかった。バタヴィアの蘭印政庁は研究対象を細かく指定してきただけでなく、一切の費用を政庁が負担すること、そして学問的目的達成のために必要なあらゆる援助を惜しまぬよう公使に指示さえした。シーボルトが助手と画家を要請すると、政庁は薬剤

師ハインリヒ・ビュルガーと画家カルル・フーベルト・ドゥ・フィレネーフェの両人を派遣してくれた。シーボルトは旅に同行する日本人の何人かの歓心を買うことも忘れなかった。自然科学研究のために制限を緩和して援助を惜しまぬという確約まで取り付けた。ただ商館長のヨハン・ウィレム・ドゥ・スチュルレル大佐はどういうわけかかれに好意的ではなかった。シーボルトに寄せる政庁の援助がかれの利害を損なうと看做されたためなのか定かではない。大佐の不機嫌の理由をシーボルト自身も理解できなかった。

シーボルトは同行日本人たちを詳細に記述している。その人間観察はときに鋭く辛辣で、ときに暖かい。大通詞の末永甚左衛門、小通詞の岩瀬弥十郎、その息子の岩瀬弥七郎、商館長の私設通訳名村八太郎、江戸から派遣され長崎奉行の配下についている給人のひとり、付添検使川崎源蔵（かわさきげんぞう）（大草能登守家来水野平兵衛か）など。さらにシーボルトは私設秘書という名目で門人たちを連れて行った。ひとりは植物学に詳しい四国阿波の医師高良斎、画家登与助（川原慶賀）、標本と獣皮の作製者弁之助（源之助か）と熊吉（駒吉か）、医師二宮敬作を含む 3 人の門人（将監、慶太郎）である。いずれも通詞たちの従者という名目で総計 57 名としているが、名を挙げているのは上の 12 名だけである。それも実名かどうか、はなはだ疑わしい者が何人かいる。シーボルトは十分にかれらの功績を認識しており、その性格、能力、外見を細かく記述している。同行者の選定基準は人柄と役に立つか否かであった。だから、かれらの誠実無私の奉仕を高く評価するのは当然といえた。

旅に持参した品々には、数々の贅沢な贈答品、銀器やガラス器、水晶細工、バロメーター、高度測定のトリチェリのガラス管、ソシュールの湿度計、寒暖計、クロノメーター、六分儀、水準器、羅針盤、ガルバーニ電気治療器、組み立て式顕微鏡、小型ピアノなどが含まれていた。また携帯用薬品類、外科手術用具ももって行った。いずれもヨーロッパの高度な科学技術を誇示する道具である。シーボルトは礼儀作法、品位、立派な外見、高い科学技術などを日本人に見せつけて、先進文明への畏敬と畏怖と服従

とを喚起しようとした。[9] そのほか、大名行列の弓矢、槍、鎧櫃、陣笠等の代わりに、ビロードの袋入りの大きな日傘、剣、黄金の握りの籐の杖、絢爛たる刺繍の上履き、文机、茶道具等を携行した。

シーボルトはヨーロッパ人の眼で徳川日本を詳細に記述した。駕籠と駕籠舁き、長持、両掛、竹行李、柳行李、茶弁当、空尻や三宝荒神等の馬による旅行法、牛馬の利用法、馬具、蹄鉄、荷担ぎ人、街道や間道の様子、道標、距離の単位、地図と旅行案内書、郵便制度と国境警備、荷物や駄馬や人足の賃金、宿場の旅籠、風呂、関所、運河と橋梁の種類、航海と航海術、船の種類、港や造船所、湖や河川の舟行法、旅行者の旅装、旅行法、気候、植生、火山や地震、水路、捕鯨、薬剤、測量、製塩法、漁法、など細かく具体的に記している。博物学の世紀とはかくなるものか、と思わせる記述である。おそらく同行日本人に頻繁に質問し、メモにとったことであろう。しばしば思い違いが含まれているとはいえ、われわれはこのおかげで江戸の風俗文化習慣の一端を知ることができるのである。[10] シーボルトの参府旅行は 162 回目に当たり、1826 年 2 月 15 日（文政 9 年旧暦 1 月 9 日）未明に出島を出立、つぎのような行路をとって江戸へ向かった。長崎峠、諫早、島原湾、大村湾、松原、彼杵、嬉野、肥前佐賀、神崎、中原、轟木、田代、内野、飯塚、直方、黒崎、小倉、2 月 22 日下関着、3 月 2 日下関発、瀬戸内海を海路で 3 月 7 日室着、9 日室発、姫路、大坂 4 泊、京都 7 泊、3 月 25 日京都発、4 月 10 日江戸着。5 月 18 日江戸発、京都 6 泊、大坂 6 泊、7 月 7 日長崎帰着である。全行程は 143 日であった。ケンペルが 1691 年に行った参府旅行は 83 日だったから、ほぼ 2 倍近くの日数がかかったことになる。

四

シーボルトの一行が激しいにわか雨のなか、藤沢宿を出発して川崎にたどりついた時は夕方になっていた。翌 4 月 10 日（旧暦 3 月 4 日）の早朝、礼装して六郷川を越え、将軍の都・江戸へと向かった。途中の大森村の宿舎（本陣？）には薩摩と中津の元藩主が待っていた。この好奇心に満

ちた藩主たちとの興味深い遣り取りののち、ふたたび出立した一行は江戸の町へ入っていく。シーボルトはにぎやかな広い通りに並んでいる商家の商品を列挙している。下駄、文房具、絵画用品、日傘、雨傘、着物、竹細工、籠、小間物、書籍、地図、印鑑、紙、米、茶、刃物、刀剣、人形、塗り物、鏡、喫煙具、鼈甲（べっこう）の髪飾り、ガラス、酒、玩具、乾物、仏像、墓石、神具仏具、提灯、茶道具、毛皮、雨合羽、漬物、乾物、油、野菜、薬種、金魚、畳、藁ゴザ、藁縄、馬具、海綿、食料、花束、植物、生魚、宝石等々。[11] 日本橋本石町にあった長崎屋に旅装を解いたのは午後の 2 時であった。すぐに長崎奉行の代理で旅行中同行した上検使が、2 人の上検使と勘定方を伴い来訪し、長崎奉行の名代として使節に歓迎の辞を述べた。かれらは高慢な態度で覚書を手渡したとシーボルトは記している。[12] おそらく儀式として堅苦しく振舞ったのであろう。覚書の内容は、江戸に無事到着を慶ぶ祝意とともに、慣例に従って慎重に行動するよう要請したものであった。使節側は恒例によりリキュールと砂糖づけを供してもてなした。この日、桂川甫賢、奥平大膳大夫、神谷源内、大槻玄沢、才四郎（吉雄忠次郎）らがつぎつぎに来訪したが、大検使は名刺のみを使節に提示し面会を許さなかった。驚くべきは、このころすでにオランダ語を少しは話したり聴き分けたりする者が相当数にのぼったことであろう。中津藩の元藩主はオランダ贔屓（びいき）で、夜にはこの老公を初めとするオランダかぶれの人々と使節一行は楽しく過ごしている。その夜を「独創的な喜劇」とシーボルトは呼んだ。[13] その場に居合わせた日本人たちは皆オランダ風のあれこれに身も心も打ち込んでおり、日本人同士が互いに、あるいは使節一行と片言のオランダ語を操って意思の疎通をはかる様が滑稽だったのであろう。如才なく振舞う者、愛想笑いをする者、すっかり打ち解け寛（くつろ）ぐ者、緊張して会話する者など居て、その場の雰囲気がおかしみを誘ったに相違ないが、シーボルトは観察者として辛辣かつ的確に客人の性格描写を行っている。中津の老隠居は上に挙げた使節の道具類のうち、とくに小型のピアノに興味を示したとある。クロノメーターや顕微鏡にも注目したが、老公の方も各種の時計を見せて使節一行を感心させた。老公は金属製の温度計や寒暖

計がついている時計や十進法の文字盤のついた時計を持参した。好奇心に満ちた無邪気な元藩主の様子が伝わってくる。

翌 13 日には多くの日本人の友人や医師たちが訪れた。かれは日本の医師のヒエラルキーについて聞き書きをしている。すなわち医師全体は将軍の医師、大名の医師、開業医に分類できる。将軍の医師はそれぞれ法印（内科のみ）、法眼（内科と外科）、法橋（奥医師と表医師）の階級に分かれ、なかでも一番高い位が御匙役である。大名の医師は侍臣になるか、法眼か、法橋の位を得なければならない。また奥医師、表医師の区別もある。腕がよければ開業医でも御目見医師になれる。かれらは参内の資格もある。開業医に階位はない。専門部門により、本道（内科）、外科、本草家（薬学者）、婦人科医（助産婦、産科）、小児科（疱瘡医）、眼科、口中科（歯医者）、整骨科（骨接医者）、鍼医者、灸師、按摩取（導引）に分類される。将軍や大名の侍医は侍のように二本差で、主人と同じ定紋をつけている。内科と産科は僧侶のように剃髪しているが、その他の医師は総髪に髷を結っている。この日、町で三町を焼く火事があった、とシーボルトは記している。ケンペルも火事（放火）のことを書いているから、江戸の災害対策は百年以上経っても相変わらず改善されていなかったようである。[14]

15 日には薩摩の老公と中津の老公が使節を正式に訪問した。薩摩の元藩主は自分を門弟にせよと仰せになる。日本の危険な病気について本を著せとも言われた。老公が持ってきた一羽の鳥を剥製にしてみせたとあるが、その場で解剖したということであろうか。シーボルトは剥製師を雇っていたから、少なくとも剥製の技術には習熟していたことであろう。またその折、身分の高い婦人の胸の病気を畏れ多いことではあるがヨーロッパの流儀で胸を開けさせて診察したと書いている。大名の家族たちは端正、礼儀作法、上品さ、親切、誠実、慎ましやかさ等の特性で傑出しており、教養あるヨーロッパ人に匹敵すると賞賛もしている。

16 日は最上徳内という数学に精通している者が訪れ、談論風発の末に密かに国禁の地図を貸してくれる。蝦夷の海と樺太島（サハリン）の略図 2 枚である。徳内によれば、1 緯度はおよそ 29 里に相当する。かれは樺

太島の犬橇(いぬぞり)とか、氷山とか、極寒の気候、海草の効用、タタール人、死の風習等について話した。17 日から 19 日にかけて、桂川甫賢、大槻玄沢、高橋作左衛門、中津の老公などの友人たちが頻りに訪れる。20 日には江戸に地震があり、20 秒ほど余震がある。この日、幕府の御典医を前に豚を使って眼の手術を実演した。21 日の日記の記述では、十一代将軍家斉の 14 歳の十二男が死去したため拝謁の儀は延期とある。その数日前から徳内とアイヌ語の編纂に取り掛かっている。23 日には幕府の医師たちに天然痘について説明し、将軍の命があれば牛痘漿をバタヴィアから取り寄せ種痘の手ほどきをすると約束した。25 日には幕府の眼科医（侍医土生玄碩か）らにペラドンナを処方し瞳孔を開く実験をして見せる。その効能に大喝采が起こったと書いている。これはおそらく土生が『師談録』で言及し、水谷豊文が紹介している薬草「莨菪（ハシリドコロ）」のことだと思われる。26 日には新生児の兎唇(みつくち)の手術をして賞賛を博した。また 3 人の子供に種痘を施す。27 日にも 2 人の子供に種痘をする。種が古いので効くかどうか分からないと書いている。

五

5 月 1 日、旧暦の 3 月 25 日の朝 6 時、いよいよ将軍に拝謁の段になり、使節 3 人は駕籠で、護衛は徒歩で 2 町の距離を城へ向かう。駕籠は常盤橋を渡り、大名屋敷に沿って大手門にいたる。番所でしばし休憩し、まずい茶を喫していると長崎奉行、外国人接待係の大目付と作事奉行が百人番頭と連れ立って現れる。ここからは徒歩で進む。御殿前で上検使と廷臣たちの出迎えを受ける。廷臣たちは頭をきれいに剃り上げ僧服のような黒衣を着ているとシーボルトは記している。これは茶坊主たちのことであろう。控えの間で使節たちはしばし自由に寛ぐことが許された。越前侯、近江城主井伊掃部頭(かもんのかみ)、唐津侯、平戸侯、将軍の世子、一橋侯、田安侯らがつぎつぎに見物に現れる。

やがて長崎奉行と大目付、作事奉行が登場し謁見の式次第を練習することになった。まず四方が板張りの回廊に囲まれた謁見の間の 2 番目の角

で使節の随員 2 人が残り、商館長 1 人が千畳敷の大広間の前にいたると、奉行と 2 人の接待係が恭しくお辞儀をして回廊に沿ってなお 20 歩ほど進み、奉行は広間に向って畳に坐る。使節の方は板張りの床に日本流に坐ることを要求された。使節はそれから奉行に従い大股で 10 歩進み、3 段の階段の向こうにある畳敷きの部屋の前の柱に達する。どの木部も金張りで精巧な彫刻が施されている。使節はここで跪いて恭しく二拝、三拝し、3 回目のお辞儀の時、色白の美少年が 2 人、階段を下まで降りてきた。これが将軍の御子たちであった。これで予行演習は終りだった。

やがて拝謁の時間がきた。使節と随員 2 人は奉行と廷臣に導かれ、2 人の上検使と通詞が随行して大広間の 2 つ目の曲がり角に達すると上検使は残り、通詞は 3 つ目の角までついて行った。シーという声がして将軍が近づいてくる様子である。奉行は謁見の間の柱のところまで行くと大通詞は廊下の床に平伏した。使節はその場に立ち止まったままである。それから奉行は使節を廊下の表側の拝謁席まで伴った。使節はここで跪いて頭を垂れた。不意に奏者番が「オランダ・カピタン！」と声をあげた。これで拝謁は終わりだった。将軍の影も見えなかったとシーボルトは記している。[15] 因みにカピタンとは商館長のことである。

シーボルトたちをたじろがしたのは不躾（ぶしつけ）な視線だった。町中でもそうであったが、ここ江戸城内での高位高官たちの好奇で無作法な視線であった。見物されるのもこれが最後としばらく我慢したと彼は記している。しかしながらケンペルが歌ったり踊ったりさせられたことを思えば、それで済んだのはまだしも幸せというべきかとも書いている。実際、ケンペルは竹の御簾（みす）の向こうに居る将軍と奥方の前で演芸会をやらされ、ドイツ語で恋の歌まで歌わせられている。[16]

お昼頃、かれらは将軍の御殿を離れて奥の世子のところへ赴く。巨大な石垣と広い濠の間を抜けて御殿に着き、しばらく休憩してから世子との会見の場を下見し、まもなく拝謁のために侍臣と通詞の案内で広間へ向かう。またもや回廊の板張りの床に坐らされ、名代（みょうだい）の重臣たちに恭しく拝跪（はいき）した。右方に奉行と大目付らが威儀を正して坐っている。シーボルトたち随員が

控えていると、やがて使節が戻ってきた。ここで奉行と大目付らが拝謁の栄を得たことに祝辞を述べ、例によってしばらく重臣たちの好奇の目に晒された後ようやく退出が許された。茶坊主たちに案内され玄関に向かう。かれら茶坊主にシーボルトは悪い印象をもっている。かれらの蒼白く尊大で無遠慮な人相、卑屈な慇懃さ、落ち着きのない眼差し、痙攣する笑いなどにいよいよ反感を募らせている。シーボルトは身分の低い者にもオランダ人は遠慮しすぎており、打ち解けた間柄になろうとしすぎていると反省している。[17] 旅行中あるいは江戸で知り合った日本人の 2 つの階層のうち、医師や学者たちは非常に楽しく愉快で啓発的であるとシーボルトは感じた。その一方で上級役人や貴人たちのよそよそしい態度に共感を覚えないと述べている。

使節の一行は 2 度の拝謁を済ませてからさらに 13 度もの挨拶回りをした。老中や若年寄のような幕府の高官たちを巡ったのである。それはおおむね次のような段取りで進んだ。高官を訪問して進物を飾った台の近くの畳に坐ると、家臣たちが莨盆を両手に捧げて落ち着いた足取りで室内に入り、仰々しい作法でそれを使節の前に置く。まもなく家臣がものものしい態度で、白い茶碗にきれいに粉にした茶を熱湯で溶かした飲物を持って入ってくる。それから使節の前に 2 人の用人が現れ、主人はまだ城中であると詫び、将軍に拝謁した祝辞を述べる。使節は恭しく答礼をする。当方のお辞儀が丁寧すぎて残念だとシーボルトは書いている。使節は閣下のご機嫌を伺い、もはや存在しない東インド会社の社長名において贈物を納めてほしいと口上を述べる。各人の前に砂糖菓子が漆塗りの小皿で供され、饗応役がそれを勧める。苦い抹茶を甘い菓子で和らげるのである。交互に何度もお辞儀を交わして、主人側の厚い好意を謝して暇乞いをすると、用人たちは退席する。なおしばらく坐っていると、眼前の引戸の障子の小さい紙の穴から、ご婦人方の眼や小さい口や髪飾りやけばけばしい衣装が見え隠れする。この時代には窃視は少しも無作法ではなかったらしい。障子の穴の背後の光景を想像する楽しみあればこそ、苦しい姿勢で坐り続けていたのであるとかれは書いている。また装身具（杖、帽子、時計、指輪、

ブローチ、剣、籐のステッキなど）を見せるよう丁重に頼まれる。取り上げられると思ったのか、溜息をつきつき渡したと書いている。シーボルトは金色の唇、化粧した頬、黒く染めた鉄漿（おはぐろ）の歯、かわいらしい手などを想像する。やがて所持品が感謝と感想とともに返却される。帽子はロシア人のものに似ているとか、髪型が昔のオランダ人とは違う、とかいう感想である。さらに筆墨が運ばれてきて、扇子や紙にオランダの格言を書くよう求められた。

日本の習慣では訪問者は出された菓子を持ち帰ってもいいことになっていると述べ、かつて観察した、懐紙に包み水引を掛けて持ち帰る宿舎の息子の手際よさを回想している。家来が莨盆、茶碗を仰々しく持ち去ると、用人がまた出てくる。ふたたび丁寧なお辞儀を繰り返しながら主君に挨拶の伝言を頼み、もてなしに礼を述べる。ここでようやく使節一行は立ち去っていいのである。しびれた足をほぐしながら、また次の屋敷でほぼ同じことを繰り返す。どこでも主人は不在で用人が応対し、拷問台に足を曲げて坐り、好奇な視線をあび、莨を何度もすい、茶を飲み、砂糖菓子を食べ、警句を書き、珍しい品を調査され、15 時間の荒行に耐えて、やっとの思いで夜の 9 時に頭痛と胃痛をともなって「避難所」に帰着してもまだ終りではない。今度は奉行の用人がやって来て将軍拝謁の祝辞を述べ、卵の大きな箱と二尾の海魚（鯛？）を差し出すのである。

このような苦行を経験しては、自然に興味を持つ学者に好感を抱いて、啓発的で楽しい人々と評価したのは当然だったといえる。シーボルトの記述に凍結されているのは、高貴な江戸人たちのルーティン化した日常である。非合理な形式主義に雁字搦めにされている人々の閉塞空間に迷い込んだ西洋人の批判的視線である。シーボルトの『日本』は江戸後期の人々の、とくに秘匿されてきた江戸城内の武士の儀礼や習慣が逐一記録されている。いわば西洋の博物学者による非西洋の記録である。ここにはケンペルが示したような五代将軍綱吉への共感と賛美はもはやない。家斉の治世であるが、将軍が謁見の間の御簾の向こうにはたしていたのかさえも定かではなくなっている。その記述からは将軍の声はもはや聞こえてはこない。

江戸人の心性を忘れてしまった現代のわれわれにも、シーボルトの記録した日本人たちは異邦人に見える。いつの間にか彼の視線に同化して西洋化してしまっている自分に気づくのである。[18]

六

5月4日に将軍と世子にお別れを言上する拝謁の儀式があった。前回はシーボルトのような随行者は使節に従い御前にまかりこすことも許されなかったが、今回は拝謁が随行者にも叶うよう坊主衆に頼み込んだ。奉行や高官が協議の末、願いは聞き届けられたが、使節が将軍の御前で拝跪している間、広間の入口に控えていなければならなかった。使節のみを厚遇するのは封建の習いとはいえ、シーボルトにしてみれば尊敬もしていない使節と差別されるのは不名誉と考えたようである。しかしながら随員は日本人の高官に混じって使節の不慣れなお辞儀や拝跪を傍観する余裕があったのだから、どちらがいいかは考えものであろう。ここで奉行らは老中から使節への命令書を朗読した。内容は以下の通りである。[19]

（1）オランダ人はポルトガル人と係わり合いになってはならない。もし他国からポルトガルと入魂（じっこん）の旨を聞き及んだ場合は日本渡海の停止を申し渡す。

（2）キリシタン宗門の者を渡来させてはならない。

（3）日本と引き続き商売を望むなら、ポルトガル人が日本に抱いている意図や計画を通報すること。

（4）ポルトガル人がどこかの国を改宗させようとしていると聞き及んだなら、長崎奉行まで申しあげるべきこと。

（5）唐人がポルトガル人を船で運ぶことを知ったら奉行まで通報すべきこと。

（6）日本に渡海する唐船を奪取すべからざること。

（7）オランダが通商する国々のうちで、ポルトガルとも通商している国々があれば、文書をもってカピタンによりその旨奉行まで差し出すべきこと。

（8） 琉球国は日本に臣属するものゆえ、大小にかかわらず船を奪取してはならない。

使節は老中にやや頭を向けて持ち上げるようにしながら、「ご命令は相分かりました。バタヴィアの支配人まで正式に知らせます」と答弁する。これを奉行は老中に取り次ぎ、使節は丁寧にお辞儀をして退出を許される。

使節が廊下へ退出して将軍から真綿入りの絹の「寝室着」30 領が贈物として下賜される。それから元の場所に戻り丁寧にお辞儀をする。廊下へ向きをかえると、同じ時服を 20 領載せた三宝が世子の名で渡される。また深々と頭を下げて感謝の意を表す。接待役と奉行らがまた姿を見せて老中からの江戸出立許可証を手渡すと、使節は丁寧にお辞儀しながら受け取る。控えの間でまたもや接待役と奉行が拝謁の終了を寿ぐ。一行は 2・3 分周囲の好奇心を満足させてから、世子の御殿へ向かう。この別れの儀式は最初の拝謁時よりはるかに簡略になっており、午後の 1 時には宿舎へ帰着することができた。

上に挙げた命令書は、ケンペルの在日したころから変わらない幕府の対ポルトガル政策を如実に示している。ケンペルによれば、ポルトガル人ほど日本に早くから根を下ろし、日本にとって危険な存在はない。新しい物資と宗教を利用して日本人の一部の心をとらえたが、さらに支配者になろうと陰謀を企てた。その証拠を喜望峰付近で入手し幕府に知らせたのがオランダ人である。幕府はしだいにポルトガルに不信を募らせ、この種の外国からの導火線を排除すべく、やがてポルトガル人の国外退去と日本人の海外渡航の禁止が施行された。国内のキリシタンに対しては、キリストの御名を呼ばず、十字架を身につけず、キリストを信仰しないように誓約させた。改宗しないキリシタンには磔刑と火あぶりの極刑で迫害した。それでも宗徒の抵抗は頑強で、島原で最後の決戦を挑んできた。1638 年 4 月 12 日に島原の乱は終息した。オランダは幕府に忠誠を尽くし、有馬一揆の連中にも敵対してきた。ところが家康と秀忠から御朱印状を頂戴しているにもかかわらず、不当にもこの権利は侵害され、囚人のように監視され、

日本国民との接触を一切禁じられた。こうして出島の狭い空間に押し籠められた代償が年間 50 万オンスの通商認可であった。このようにケンペルは不平を鳴らしている。[20] 慣例により読み上げられる命令書は、幕府の対ポルトガル政策のみならず対唐国対策、対琉球対策も示している。その本質は密告主義である。また本文書は逆に小国オランダの巧妙な外交をも推測させるものである。ケンペル当時と同じく、シーボルト在日のころも、オランダと長崎のほかに対馬と朝鮮、琉球と薩摩、松前と蝦夷という通商の窓口が開かれていた。この現状を考えれば、「鎖国」というより「海禁」の概念の方がふさわしい。日本人の海外渡航はこの海外への四つの窓を通して一部は解禁だったからである。琉球は独立国家でありながら外交上は清国と日本に服従の姿勢をとっていた。朝鮮には沢山の日本人が滞在していた。東南アジアにも朱印船が行き来していた。経済利便を第一に考える関係だったとはいえ、まったく国を封鎖していたわけではないのである。しかしながら、シーボルトが記録した封建体制の日本は純粋培養されたような不可思議な人々の住む国であり、経済的には繁栄しているが、すでに世界的に文化の孤絶した国家であったことが分かる。たしかにケンペルは日本を肯定して、自然に恵まれ必要物資を豊富に産する国であるから、外国に処する態度としては、計略に乗らず、貪欲を跳ね返し、騙されないように、戦わないように国境を守ることが得策であると述べている。日本は地理的条件にも恵まれており、国民が勇猛であるゆえ、国土を守り通せるであろうとも言っている。しかしケンペルの『日本誌』の編纂者ドームは、本来日本人が持っていた発明の精神は専制政治に抑圧され、ヨーロッパ人にはるかに追い抜かれてしまったと言い、進歩がないと批判している。シーボルトの時代にはますますこの傾向が強まって、安逸を貪って安寧にまどろんでいた。シーボルトはいわゆる「シーボルト事件」により日本を逐われてから 30 年後の 1859 年に、13 歳の息子アレクサンダーを伴い再来日する。すでに日本は開国か鎖国かの選択を迫られ、風雲急をつげる時勢となっていた。かつてののんびりとした日本は消え、猛々しく荒んだ国になっていた。[21]

注

1　羽仁説子『シーボルトの娘たち』新日本出版社、1992年。

2　宮崎道生『シーボルトと鎖国・開国日本』思文閣出版、1997年。石山禎一『シーボルト　日本の植物に賭けた生涯』里文出版、2000年。加藤僖重『牧野標本館所蔵のシーボルトコレクション』思文閣出版、2003年。シーボルト『シーボルト　日本の植物』大場秀章監修解説、瀬倉正克訳、八坂書房、1996年。タマラ・チェルナーヤ監修『シーボルト・コレクション日本植物図譜展』アート・ライフ、2002年。「慶應義塾に見るシーボルト」展、三田メディアセンター展示委員会、2004年： http://www2.ocn.ne.jp/~oine/otaki/index.html 参照。

3　秦新二『文政十一年のスパイ合戦　検証・謎のシーボルト事件』文藝春秋　1996年ほか

4　片桐一男「ケンペル、ツュンベリー、シーボルトの日本研究と阿蘭陀通詞」：ツュンベリー『江戸参府随行記』所収、高橋文訳 1994年、東洋文庫 583、平凡社

5　久米康生『シーボルトと鳴滝塾』木耳社、1989年、樹形図「鳴滝塾の展開」参照。

6　シーボルト『日本』第二巻、中井晶夫・斎藤信訳、雄松堂書店、1978年、111 ページ以下。

7　上掲シーボルト『日本』第二巻口絵参照。

8　シーボルト『日本』第二巻、117 ページ以下。

9　シーボルト『日本』第二巻、177-178 ページ。

10　シーボルト『日本』第二巻、178-198 ページ。

11　シーボルト『日本』第三巻、57 ページ。

12　シーボルト『参府旅行中の日記』斎藤信訳、思文閣出版、1983年、105 ページには「たいへん堅苦しい仕種(しぐさ)で」とある。

13　シーボルト『日本』第三巻、63 ページ。

14　ケンペル『日本誌』今井正訳、下巻、霞ヶ関出版、1973年、302 ページ。

15　シーボルト『日本』第三巻、75 ページ。

16　柴田陽弘「ケンペルの旅」：『藝文研究』86 号、2004年、102f. 所収。エンゲルベルト・ケンペル『日本誌』下巻、霞ヶ関出版、1973年、319 ページ。

17　シーボルト『日本』第三巻、77 ページ。

18　B・M・ボダルト＝ベイリー『ケンペルと徳川綱吉』中直一訳、中公新書、1994年。ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』NHKブックス、1996年。ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー『遥かなる

目的地　ケンペルと徳川日本の出会い』中直一・小林早百合訳、大阪大学出版会、1999年。

19　シーボルト『日本』第三巻、84 ページ。

20　Engelbert Kaemper: Geschichte und Beschreibung von Japan. Herg. von Christian Wilhelm Dohm. Lemgo 1777-79. Neudruck in Stuttgart 1964. 今井正訳『日本誌』霞ヶ関出版、1973年、下巻、468 ページ以下。

21　シーボルト『シーボルト江戸参府紀行』呉秀三訳註、雄松堂書店、1931年。箭内健次・斉藤信ほか編『シーボルト < 日本 > の研究と解説』講談社、1977年。シーボルト『シーボルト日記　再来日時の幕末見聞記』石山禎一・牧幸一訳、八坂書房、2005年。アレクサンダー・フォン・シーボルト『シーボルト最後の日本旅行』斉藤信訳、東洋文庫 398、平凡社、1981年。ケンペル『日本誌』下巻、445 ページ以下。中西啓『シーボルト前後　長崎医学史ノート』長崎文献社、1989年。小堀桂一郎『鎖国の思想』中公新書、1974年。ヴォルフガング・ゲンショレク『評伝シーボルト』眞岩啓子訳、講談社、1993年。宮崎道生『シーボルトと鎖国・開国日本』思文閣出版、1997年。宮崎道生・箭内健次編『シーボルトと日本の開国　近代化』続群書類従完成会、1997年。石山禎一ほか編『新シーボルト研究』Ⅰ・Ⅱ、八坂書房、2003年。法政大学フォン・シーボルト研究会編『シーボルト研究論集』法政大学、1985年。日獨文化協会編『シーボルト研究』岩波書店、1938年。金子厚男『シーボルトの絵師』青潮社、1982年。大場秀章編『シーボルトの 21 世紀』東京大学出版会、2003年。京都国立博物館・東京国立博物館・朝日出版社編『シーボルトと日本』朝日出版社、1988年。アルレッテ・カウヴェンホーフェン／マティ・フォラー『シーボルトと日本　その生涯と仕事』ライデン、2000年。